

英 語（リスニング）

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和6年度共通テストの「英語（リスニング）」の受験者は、本試験が447,519人（昨年度は461,993人）で、受験者全体の約98.10%（昨年度は約98.02%）に当たる。このことは、本テストの実施そのものや、問題の質や難易度、使用される言語材料等が、受験者のみならず、全国の高等学校関係者及び英語教育関係者等、多方面に与える影響が非常に大きいことを意味している。満点は「英語（リーディング）」と同じ100点であり、平均点は67.24点（昨年度は62.35点）であった。

なお、評価に当たっては、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

内容・範囲に関しては、「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「英語表現Ⅰ」を網羅している。題材は身近な話題から社会問題まで幅広く、絵や図表を見て答える問題、また講義を聞いて内容をまとめる問題や会話を聞いて内容を把握して答える問題等で構成されていた。第1問A 2文の短い発話を聞いて、内容に合う文を選ぶ問題。筆記用具を借りる、友人に映画代を支払うと申し出る、市役所への道を尋ねる、ホームパーティーの料理を作る等の日常生活で起こりうる場面設定である。しかし道を尋ねるという状況は、現在では余りないのではないかと。

第1問B 2文程度の短い発話を聞いて、その内容に合う絵を選ぶ問題。落葉している木、自室での自分と犬との過ごし方、携帯扇風機の形状と価格が描写されている。

第2問 日本語の設定を参考に、短い対話を聞いて、問いの答えとして適切なものを選ぶ問題。ペットの猫、写真に写る幼少の自分、忘れ物の封筒、予約するレストランの席が描写されている。

第3問 カフェでの店員と客の会話、ピアノ購入の相談、リサイクルショップでの購入の提案、引越準備中の会話、牧場訪問への同行の誘い、高校生の宿題の会話等、日常的な状況設定である。問12の持込みカップで割引される話や問14の古着等、環境問題を意識した話題も取り上げられている。このように環境問題やSDGs等を意識した問題も今後更に期待するところである。

第4問A 問18～21は友人同士のアミューズメントパークでの行動を時系列に並べる問題。正解の順番は発話の順番と一致するわけではないので、内容を正確に聞き取る力が必要。問22～25は、夏季講座の科目の空欄を埋め、スケジュール表を完成させる問題。曜日順に発話されていないので、曜日と科目、時間の関係を正確に聞き取り、確定した情報から随時解答することが必要。

第4問B 文化祭の出し物に関する4人の提案を聞き、参加者が20分以内で体験できる、10人以下で運営できる、費用がかからないという3つの条件全てを満たすものを選ぶ問題。

第5問 ガラスの歴史や現代のガラス技術の進歩等に関する講義を聞き、ワークシートの空欄を埋めながら、講義の要点をまとめ、さらにグラフから読み取れる情報を答える問題。現代でもガラス容器が好まれる理由として環境問題にも触れている。

第6問A 旅行中の移動方法について2人の人物の会話を聞き、問いに関して適切なものを選ぶ問題。会話の中で話されていること、最終的に決めたことが問われている。

第6問B 運動を始めることについて話している4人の学生の会話を聞き取り、問いの答えとして最も適切なものを選ぶ問題。

3 分量・程度

出題は例年どおりで、大問が6問、設問が37問の問題構成である。読み上げ回数も変更はなく、第1～2問が2回、第3～6問が1回であった。多様な英語が使用されていたが、音声・スピード共に、聞き取りやすかった。以下、準備時間をP、音声が流れる時間をL、解答時間をAで示す。第1問A（各英文13語～18語・2回読み、L：約6～8秒×2・A：約6秒）1～2文の短い英文を聞き、概要を正しく把握して最も適切な選択肢（文）を選ぶ問題。聞こえてくる英語だけに頼らず、文脈から判断し、選択肢にある動詞の言い換えを認識する問い、時制を判断する問いもあったが、全体的には易しい問題であった。

第1問B（各英文8語～17語・2回読み、L：約5～8秒×2・A：約4秒）1～2文の短い英文を聞き、その英文が表している選択肢（イラスト）を選ぶ問題。4種類のイラストの差が分かりやすく、全体的に易しい問題であった。

第2問（各対話文26語～35語・各設問5語～8語・2回読み、L：約20秒×2・A：約4秒）全体的に簡単すぎると思われる。2つのポイントを聞き取れば、正答に辿り着ける問題であった。

第3問（各対話文48語～51語・1回読み、L：約22秒・A：約8秒）若干の英語に難しいものがあったとしても、文脈から判断できる程度であり、難易度は標準。

第4問A（問18～21＝68語・1回読み、P：約10秒・L：約31秒・A：約20秒／問22～25＝93語・1回読み、P：約18秒・L：約49秒・A：約20秒）話の展開は、同時に2ヶ所の解答部分が述べられるなど、単純ではなかったが、難易度的には標準。

第4問B（4人の各話者＝42語～47語・1回読み、P：約15秒・L：約80秒・A：約9秒）解答時間は短いですが、整理・確認しながら、正解を導き出すことができる標準的な問題である。

第5問（英文講義＝270語・1回読み、P：約55秒・L：約146秒・A：約60秒／後半プレゼンテーション＝58語・1回読み、P：約7秒・L：約35秒・A：約33秒）音声は聞き取りやすく、スピードも比較的ゆっくりで理解しやすいが、ワークシートの表の記載が分かりにくく、難易度が非常に高い問題があった。

第6問A（対話文全体＝156語・1回読み、P：約15秒・L：約67秒・A：約20秒）流れを掴みやすい標準的な会話問題である。

第6問B（英文全体＝218語・1回読み、P：約16秒・L：約103秒・A：約30秒）4人の発話は聞きやすく、容易に4人の聞き分けができる。図表の問いは簡単で、9割の正答率だった。

4 表現・形式

第1問A 短いモノログに合う英文を選ぶ設問形式。問題文と選択肢で言い換えがされている。正答率からも判断できるが、問1から問4へと徐々に難易度が上がっており、受験者にとって徐々に問題に慣れていくことが可能となったであろう。問3でのoneの使用、問4での時制の把握に戸惑った受験者もあったかもしれない。問4では、聞き取り文と選択肢と両方の時制表現に気を付けた上での状況把握が求められている。

第1問B 短いモノログに合うイラストを選ぶ設問形式。イラストが解答への補助となり正答率はおおむね高い。問5から問7の3問全てが、ほぼ8割から9割の正答率であること、また、小学校での外国語の教科化等に伴い、児童生徒の「聞くこと」の力も伸長している状況等を踏まえ、イラストで示す場面や状況設定の複雑化も検討でき得る。例えば、問6での眠っている犬の場所の選択肢を増やす、状況を把握する対象を1つから2つへ増やす等が考えられる。問7のslimの最上級slimmestは聞き取る表現としてはなじみが余りなかったかもしれない。

第2問 短いダイアログに合うイラストを選ぶ設問形式。状況は説明されているが、問いは書かれていない。1回目の質問後に2回目のダイアログを聞くことができ、正答率が高い。特に、問8及び問10の正答率は10割に近く、問9、問11についても、ほぼ8割の正答率となった。様々な形式、様々な難易度の問題が必要ではあるが、第1問B及び第2問での正しいイラストを選択する問題については、問題の形式の在り方そのものを検討する時期に来ていると言える。イラスト問題を継続するとしても、例えば、問10の場所を示す前置詞については学習指導要領では小学校5年生で取り扱っており、「話すこと」「聞くこと」で小学校から慣れ親しんでいる表現であるため、今後は更に複雑な状況をイラストに含むことが可能である。また、問8の猫の姿を把握する問題については、聞き取るポイントが3つ（体色、尻尾の長さ、尻尾の先の色）あるが、その内2つの情報が聞き取れれば正解に辿り着けるので、猫がいる場所や猫の周りの様子等も含んだイラストを設定し状況を把握させるような英文にする等、更なる工夫の検討が可能である。問9での in the front という表現は、in front of と違いなじみがない表現で、聞き取れなかった受験者もいたことが考えられる。

第3問 短いダイアログを聞き、問いに答える形式。状況が説明され、問いも書かれているので、ダイアログを聞く前に問いを読んでおくことで、正答しやすくなるだろう。アメリカ英語以外の話者も含まれていたが、聞き取る上で大きな影響はなかったと思われる。問12では、持ち込みカップであれば割引があるという環境問題及び最近のカフェ事情も反映している問題であった。問13での disturb という語彙が聞き取れなくとも、後半 How about～以下の会話により正答を導くことが容易であったと思われる。問15、問16については、第3問の中では正答率が半分以上を超えなかった問題となった。場面設定が余りなじみのないもので、問15での the moving company の語彙が把握できなかったことが考えられる。また、問16において、若干なじみがない場面設定と男女についての固定概念から、生徒が戸惑ったであろうと推測できるが、馬を怖がっているのが女性でなく男性であるという視点は、様々な視点から場面設定がなされているという点でよい。

第4問A 放送文の内容に沿って情報を整理し、イラストを時系列に並べたり、図表やグラフを完成させたりする形式。問18～21は、正答率が8割を超えており、一度の聞き取りで概要を適切に把握し正答できていたと言える。問22～25においては、ほぼ解答順のとおり英文を聞き取れば正答に辿りつける問題であった。語彙の言い換えや述べられる順序に惑わされることなく適切に聞き取れていたことは喜ばしい。

第4問B 4人の説明を聞き、条件に合うものを選ぶ問題。放送が始まる前に、日本語説明を理解しておけるかもポイントになる。話者に英語を母国語としない者も含まれていた。正答率は高かったが、数値の聞き取りにおいて、3人目の発話に見られる、12 of usというまとまりは、他の数値表現15 minutesや、7 peopleという表現より聞き取りにくく、聞き逃してしまった可能性がある。また、他の選択肢の説明を最後まで聞き取らせるために、正答を②より後にすることも検討願いたい。

第5問 問27～問32は、ガラスの特性とその関連技術についての講義を聞き、ワークシートに要点をまとめ、講義の内容に一致するものを選ぶ問題。また、問33では、グラフと講義の内容から分かることとして正しいものを選ぶ問題が出題された。要点を把握して内容をまとめる力や、図表の情報と組み合わせて総合的に判断する力が問われている。ワークシートは講義の流れに沿って整理されているが、例年に比べ、ワークシートが簡素化され、例えば問28～31のように最小限の語彙にまとめられていて、事前に内容を予想することが難しくなっている。さらに、文法や語法の知識も必要であり、難易度が上がったと言える。問33については、グラフが示され、なおかつ、追加された英文を聞き講義全体の内容も考慮すべきという統合的な問いとなっているが、追加で

流れる英文にはグラフの説明はない。追加される情報と聞く英文の内容について、今後の出題においては更に検討していただきたい。また、①～④の選択肢がそれぞれ長く、誤答である①～③の各英文について、前後の流れが自然な流れになっているため、正答④を選ぶのに時間がかかる難問の1つとなったように思われる。全体として、長い講義から情報を聞き逃さないように集中して聞くことが求められている。グラフや資料の利用、また、選択肢に多く言い換えが使われることから、普段の授業においても、グループ発表等を取り入れ、図表等にまとめて発表させたり、リテリングやサマリー等を取り入れ、様々な言い換えをさせたりしながら多種多様な英語を自ら生み出す力を付けることの大切さを示すものとなっている。

第6問A 旅行中の移動の方法についての2人の対話を聞き取り、対話中で話者が述べた意見を選ぶ問題と、会話の中で決まったことを問う問題であった。問題冊子に記載の日本語での状況説明が具体的であるため話の展開は分かりやすかったと思われる。会話中の意見の確認、会話の結論についての理解を問うという基本に忠実な問題であるが、全体の会話の流れを正確に把握する必要があり、会話の概要を捉える、という目的に合致している。

第6問B 運動を始めることについての4人の会話を聞き取り、要点を掴んだり、考えの根拠となる図表を選択したりする問題。4人それぞれの意見や立場を正確に把握する力、会話の概要や要点を理解して、情報を整理する力が問われている。会話の完了時の状況について問われているため、話者の考え方の変化を正確に把握する必要がある。また、会話には自然な表現が使われ、オーセンティックなものになっている。動詞での work out 及び名詞での workout の表現になじみがない受験者は、この work を walk と間違った理解をした可能性もある。知識はあっても、実際に授業で使用されることは余りないかもしれないので、授業でスモールトーク等を活用し、よりオーセンティックな表現を使用する必要がある。問37の図表については、walking や running 等、正解の workout に関連した誤答の選択肢を更に工夫することで、より識別力のある問題となったと考えられる。

5 ま と め (総括的な評価)

身近な場面設定や、実生活でありそうな状況設定が多く出題されており、1人の発話、2人による対話、4人による説明、又は討論等、形式も様々である。アメリカ英語、イギリス英語等のネイティブスピーカーに加え、英語を母語としない話者の音声もあり、聞き分けもしやすい。選択肢は工夫されていて、聞いた言葉をそのまま読み取るのではなく、言い換えられているものがほとんどで、内容を素早く把握し、該当するものを選ぶようになっている。さらに、状況に応じて含意を汲み取り理解する力が求められ、思考力・判断力・表現力等が必要とされる。一方、図から読み取る問題では、言い換えを読み取る必要がないためか、正答率は高くなっている。高等学校における日頃の授業でも、やり取りをする場面はもちろん、英文を聞き、リテリングの場面や、相手の意見に即座に反応するディスカッションやディベート等の活動を授業に取り入れていくことが必要である。

(1) 形式等の特徴

実施時間は30分、1問当たりの配点は1～4点の幅があり、読む回数は2回読み（第1問と第2問）と1回読み（第3問～第6問）に分かれ、満点は100点であった。本テストでは「リーディング」と「リスニング」がともに100点満点で構成されていたことから、より英語4技能のバランスを意識したものであると言える。流れてくる英文の長さ、選択肢の長さや解答時間も、受験者の理解力を測り、識別するのに適切なものであると言える。設問や場面設定の指示が日本語で記載されており、測る力を「聞く力」に絞るための措置として有効である。読む回数については、

試験前半における2回読みは、受験者が試験のリスニングに慣れるのに必要な配慮であり、1日目の最終科目であることを考えると、適当とも考えられる。しかし、聞く内容や正答率から判断すると、第1問B及び第2問の絵を見て選ぶ問題は、読む回数を1回にすることも考えられる。また、他の外部試験のように、写真を見て説明を選ぶ問題の採用も考えられる。

(2) 学習指導要領との整合性

今回の試験は平成21年告示の学習指導要領に基づくものであったが、平成30年告示の学習指導要領とも重なる、重要なポイントがカバーされているような問題も多く見られた。今後も、「日常的な話題」同様、「社会的な話題」について更に取り上げることで、生徒の社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面設定の増加を希望する。英語話者については、アメリカ英語中心ではあるが、イギリス英語や英語を母語としない英語話者の音声もあり、グローバル化にも対応している。このことは大いに評価できる。引き続き、様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態を反映し、アメリカ英語に偏重することなく幅広い英語を取り扱っての問題作成を継続していただきたい。

(3) 高等学校の授業改善への影響

本テストは、実生活によくある場面設定のもと、聞こえてくる英語の内容や話者の意図、話の流れなどを適切に聞き取る力が試されている。音声で流れてくるものとは違う表現で選択肢が作られているので、授業においても、簡単な英語でのリテリングやサマリーを通して、言い換えの練習が必要となる。この力はテストのためだけでなく、実際に英語でコミュニケーションをとる際に必要なスキルでもある。聞いて理解するだけでなく、リーディングにおけるスキミング的な力、流された英語の表現が言い換えられた英文を判断する語彙力、講義を聞いてメモを取る力、英語で説明された内容を図としてイメージする力等が必要となる。

内容に関しては、様々な分野から出題されているので、英語以外の教科や社会問題への興味を大切にすることと、全ての知識が英語につながることを生徒に示したい。英語の授業においても、教科書で取り上げられる社会的、国際的なトピックに合わせて、総合的な探究の時間の設定のように、教科横断的な内容の授業を行うこともこれからますます必要となってくるであろう。加えて、日常会話はもちろん、スピーチやディベート、プレゼンテーションなど英語を手段としてコミュニケーションをとる授業展開も並行して行っていく必要がある。また、ディスカッションやディベートで、相手の発言を聞き、即座に対応する言語活動が有効だろう。

毎年行われる本テストは、これからの英語教育がどのように進むべきかを示す道標であり、問題内容も変わっていくべきだと思う。小学校高学年での英語の教科化に伴い、英語に慣れ親しんだ児童が中学校、高等学校に進むことを念頭に置き、言語活動を中心とした指導を継続することが必須となっていることを、今一度高等学校教科担当教員も自覚し、実際の指導に生かす必要がある。また、この道標を軸にして、授業改善に努めていかねばならない。

(4) 要望・提案

要望としては、第1問と第2問は現在2回読みになっているが、1回読みでも良いのではないだろうか。特に絵を選ぶ問題は、同レベルであれば、1回読みで十分だと思われる。

内容については、今後も、実際の生活に即し、コミュニケーションを念頭に置いた場面・状況設定はもちろんのこと、社会問題について更に出題がなされることを願う。教科書も、身近な話題から社会問題まで幅広く扱っており、課題研究でも、生徒たちが身の回りの問題から社会問題へ目を向けられるように指導を行っているため、今後、更に幅広いトピックが取り上げられることを期待する。